



『萬葉集』における推量の助動詞の表記について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 夏井, 邦男 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00003717

『萬葉集』における推量の助動詞の表記について

夏 井 邦 男

はじめに

推量の助動詞「じ」は、音仮名で表記される場合——「自、慈、士、緇、司」と、表意の漢字で表記される場合——「不」とがある。前者については、「自」が巻を越えて使用頻度の大きなものであるのに対して、その他の字母は孤例であり等しい価値を持つものにはなっていない。後者についても、「不」字は「じ」を表記するのに専用されているが、一方では打消の助動詞「ず」を表記する際にも用いられるという浮動性がみられる。

複雑にして多彩な漢字の用法をもつ『萬葉集』において、漢語にはない国語特有の助詞・助動詞の類がいかに表記されているのであろうか。一漢字とその訓とがどのような対応関係にあるのか。更には、一漢字が二つ及びそれ以上の訓を担うものの実態など、小稿は助動詞表記の固定化の問題を『萬葉集』を中心に考察し、併せて他の上代文献と史的に比較考察するための基礎作業でもある。

まず、いわゆる推量の助動詞を表記するために使われた文字のすべてを、文字史上から整理し把握することを目的として一覧表を作成した。『時代別国語大辞典・上代編』に立項されている推量の助動

詞のうち、『萬葉集』に確かな用例のみられる八語——「じ、む、まし、べし、ましじ、らむ、けむ、らし」を対象として、その原表記を活用形の順に並べたものである。

なお、用例の検索に当たっては、正宗敦夫氏編『萬葉集総索引・単語篇』や小路一光氏著『萬葉集助動詞の研究』などの学恩に依るところが大きい。底本には澤瀉久孝氏編『萬葉集注釋・本文篇』を使用した。

一 じ

(1) 士

戀_三男子名古日歌の反歌にみられる音仮名「士」は、『古事記』では「和須禮士」へ上・火遠理命、_二「那迦士」へ上・大国主神、_三「麻多士」へ下・允恭などの例のように、「ジ」の主要な仮名字母であるが、この集中ではごく稀なものとなっている。同じ推量の「ましじ」の原表記「益士」にもへ四・七二三とへ七・一三五二にみられるほかは、やはり限られた語にしか用いられない。

これは、「士」字の使用が「自」字に比して遅かったこと(註1)によるとも考えられるのであるが、稲岡耕二氏の「指摘(註2)のように、「士」字は風流士とか遊士あるいは壮士・武士のように男子を意味する表意訓字としての用例も多い。つまり、漢字はそのものもつ表意性を消し去ることができない以上、使いにくい面もあったことによるのだろう。ここも、そうした歌の内容につながる用字かと思われるのであるが、使用頻度の低い仮名が選択される場合の理由のひとつになっている。

(2) 慈と司・緇

男 邦 井 夏
 家持の短歌にみられる「之可尔波安良司可」(註3)〈十八・四一〇七〉は、
 憶良の長歌「斯可尔波阿羅慈迦」(註4)〈五・八〇〇〉の句を学んだものと
 言われている。そして、助動詞「ジ」の表記としては、「慈」「司」
 ともに孤例であることが注目される。「慈」は新羅の郷札用字にみら
 れる(註5)ことから、漢字借用による朝鮮語の表記の影響ということも
 考えられる。

また、『校本萬葉集』の校異によれば、橘千蔭は『萬葉集略解』で
 「司ハ自ノ誤カ」としているのは、「ジ」字母として「司」字に奇異
 さを感じていたからであろう。

「緇」字も諸本間に異同はみられるが、「美要緇」(註6)〈十五・三七〇
 八〉以外に用例がない。『古語大辞典』付載の「上代萬葉仮名表」に
 よれば、『萬葉集』だけの仮名である。「司」と同様、本来は清音仮
 名であったと考えられるが、濁音「ジ」として用いられていること
 の理由がなお分明ではない。(註7)

こうした「ジ」表記の個性的な、その一首限りの文字使用は、ま

さに臨時的な要素を反映していると言えるだろう。

(3) 不

『古事記』全巻を通して、「勿」字は八例が用いられている。その
 うち「ジ」を表わしていると見られるのが二例（ともに会話文中）
 あるという。しかし、集中「じ」の訓仮名には専ら「不」字が用い
 られる。

助動詞「じ」は、「む」に対応する否定であるが、その推量（意志）
 の意が軽いところから、「ず」と混同される場合が少なくない。「じ」
 「ず」ともに未然形接続であることも形態上関連する。集中におい
 て、

○……室生の毛桃 本繁く 言ひてしものを 成らずは止まじ
 〔不成不止〕〈十一・二八三四〉

○……沈く白玉 風吹きて 海は荒るとも 取らずは止まじ〔不
 取者不正〕〈七・一三二七〉

などの例のように並立して用いられ、「不」字を「ず」とも「じ」と
 も訓ませる場合の多いことも、この両語が古人の意識において近
 かった証となる。

右と同様に、熟した句ではあるが、

○……家道をも 吾者不忘 命死なずは 〔四・五〇四〕

○……けふまでに 吾者不忘 間無くし思へば 〔四・七〇二〕
 などの歌にみられる「不」字は、それぞれ「ジ」「ズ」を表記したも
 のである。読む側からすれば訓の決定に迷うところであろう。

『続日本紀・宣命』では、「ジ」と「ズ」との区別は、「……不忘
 賜止宣……」〔第一十五詔〕や「天地乃福毛不蒙自」〔第四十五詔〕

深化とともに、「將」の現われてくる過程を精緻にとらえ、それが和文的表記慣習の固定ないし浸透を意味することを明らかにされた。

「將」字が頻用された背景に、筆録者の訓字表記への強い志向があったことを確かめたのである。

また、西尾光雄氏の『日本文章史の研究』によれば、「將」字が直下の動詞にかかるというのは、『古事記』においてもほぼ等しいといふ。集中、たとえば、「潤將」^{註15}「往見」^{註16}「へ七・一二七四」を「ヌレテユクミム」ではなくて、字余りではあっても「ヌレテユカムミム」と訓むのは、「ユカム」の「ム」を「將」で表わしたものと解され、従って「ミム」の「ム」は読添えということになる。「明日將」^{註17}「咲見」^{註18}「二一〇二」などの場合と同様である。

ただ、「アハザラメヤモ」を表記するに際しては、「將不相哉」^{註19}「へ十二・二九七八」のように、いわゆる返倒文字である「不」字に冠して用いられるようなこともあるから、訓点を記入する方法もなかった当時、恐らくは、「不相」が分析されずひとかたまりとして、総合的に訓まれたことを意味するのだろう。「將」字が広汎に使用されて行く段階においては、こうした部分的な表記のゆれとでも言うべきものも見られるのがその実態である。

先の用例にもみられたように、「已然形「め」にも「將」字の用いられるのが、集中一般の表記である。一方、『新撰萬葉集』の助詞・助動詞の表記を精査なさった浅見徹氏によれば、已然形「め」の表記に「將」字が使われていないのは、「ム」と「メ」を音相の差として捉えたためだろうという。つまり、音をも表記しようという意図から、文字と訓みとの対応の度合いが、結果的に高いものとなっていることがわかるのである。

(3) 无と無

音仮名「無」については、これを大伴家持が好んで用いた文字であろうと稲岡耕二氏がつとに指摘なさっている^{註20}。『時代別国語大辞典 上代編』付載の「主要万葉仮名一覧表」によれば、「無」よりも「无」の方が広く一般的に用いられているが、助動詞「む」の表記としては、集中ほぼ拮抗している。ともに新羅の郷札の字音としてみられるものである^{註21}。

ただし、「无」字は家持の用字にあって巻十五には一つも見当らない音仮名で、或る時期を境にして顕没しているものひとつとして指摘されている。事実、「无」字は十八〜二十の巻に限ってみられるから、巻による両字の片寄りとか、記述者の用字癖といったことも問題になりそうであるが、むしろ底本として使用した『萬葉集注釋』の本文と諸本のそれとの違いによるものであろう。

つまり、巻十七〜巻二〇の十三例について、『校本萬葉集』の底本（寛永本）はすべて「無」で統一されているのに対して、『元暦校本』では本文を持たない二例（二十四・四五〇三及び四五・一四）と「无」四〇〇八以外はすべて「无」字が用いられている。「無」と「无」との区別については、特に『元暦校本』が正確になされていると言えそうである。

(4) 目

訓仮名の出現は、言うまでもなく漢字に習熟した段階を待って誕生したものである。これは、漢字の意味のいわゆる翻訳語である訓を借りるといった二重構造をとることによって成り立っているもの

であり、漢字に対する訓の固定が背景にある。たとえば、助詞で言えは「すら」に「尚」、「がも」に「欲得」、「つつ」に「乍」、「かも」に「鴨」などのように、固定した訓を借りる方式がとられる。已然形「め」を表記した「目」もその代表的なものである。「目」字は、かなりの固定度を示したが、その割りには、巻十六以降は全くその姿をみせなくなってしまうことにその特色がある。

訓仮名とアクセントとの関係については、これを精査された鶴久氏によれば、「目・眼・海藻・米・責・亀」などの「メ」も助動詞「む」の已然形「め」もともに平声であって、アクセント上の抵触^(注20)はないという。

(5) 毛と母

集中、「毛」と「母」とは常用仮名として一般的に用いられているが、「む」の上代東国語形「も」には通俗的用字である「毛」の方が多用されている。たとえば、

○……船飾り 吾がせむ〔牟〕 日ろを 見も〔毛〕 人もがも〔二
十・四三二九〕

などのように、助動詞「む」に対して「牟」「毛」の正訛両表記が併存したなかにもそれが認められる。この種の不統一について淺見徹氏は採録者の「観念的俚言」が混入したものではないかと提案された。^(注21)「牟」は、『西本願寺本』を始めとする諸本では「武」字であることと併せて、「母」ではなく「毛」字で記されたことが注目される。

また、『萬葉集総索引』では「古布志氣毛波母」〔二十・四四一九〕の「毛」を上代東国語形として扱うが、『注釋』『全注』など多くは「恋しけ思はも」の意とする。ただし、その場合のように「はも」

が用言に接続する例は他にないから、特例としなければならぬことになる。

(6) その他

助動詞「む」には該当する漢字が定まらない事情があったようである。正訓字の選択が期待できない場合、集中の一般的特徴としては、実質概念の稀薄な字面の一定した仮名が多く用いられる一方、義訓に頼ることも当然の結果であった。

しかし、「兼・責・三・寒・甘」など漢字音の末尾に母音を添加させて成立した一字二音節の仮名によって表記される例もみられる。本居宣長が『古事記傳』（一之巻・仮字の事）で名づけた「二合の假字」に相当するものである。この中には、終止形・連体形を「敢・監・今・金・南・火・念」などや、已然形を「責・米・龜」などで表わした一度限りの用字も多数含まれており、これも複雑な様相をなす要因となっている。

三 まし

『古事記』に於て、音仮名表記だけの助動詞であった「まし」は、集中では表意の漢字「益」「申」「猿」「媛」などでも表記されるようになる。活用形は、その用例から未然形「ませ」、終止形「まし」、連体形「まし」が確かめられているが、

○……しがらみ渡し 堰かませ〔益〕ば 流るる水ものどにかあ
らまし〔二・一九七〕

の用例のなかに、未然形「ませ」を「益」字で表記したのも孤例ではあるがみられる。

特に、「益」や「申」などのように同一語に同一字が固定する傾向を示してはいるが、いずれも固有の表記として定着することはなかった。そのことは、これらが仮名書きを中心とする巻々では全く使用されることがなかったし、逆に「麻之」や「麻思」などの仮名書きが変体漢文中心の巻々でも多用されたことと無縁ではないだろう。

一般に、「その語詞に該当する漢字の定まらない語」については、視覚的に、二次的な表語性を獲得することを期待して、「字面の一定した万葉仮名で記すことが多かった」^(註22)のであるが、この「まし」の場合には、「摩世」^{〔五・七九七〕}「麻勢」^{〔十五・三五七九〕}や「麻死」^{〔一・八六〕}「麻師」^{〔九・一七六六〕}「萬旨」^{〔一・一五九〕}など一回的なものが多くみられるところにその特徴がある。「まし」が読添えられるのは、

○……戀ひむものぞと 知[㊦]者 其の夜はゆたに あらましものゝを^{〔十一・二八六七〕}

の作者不明歌にみられる例を除けば、あとはすべて人麻呂歌集に限られる。二音節の助動詞に相当する表記が省筆されることはきわめて少ないということの一斑となろう。

四 べし

終止形「倍斯」^{〔五・七九五 八三三〕}にみられる「斯」は、形容詞の終止形語尾を表記する字母として、主として巻五にだけみられ

ることについては既に指摘してある^(註23)。これは、完了の助動詞「ぬ」のついた「奴倍斯」^{〔五・七九八〕}についても、また、推量「らし」の「良斯」^{〔五・八三四〕}についても同様である。

表意の漢字としては、『古事記』にみられ、『日本書紀』にはみられない「可」「應」字が用いられている。しかも、集中この両字は連用形「べく」、終止形「べし」、連体形「べき」と三つの活用形にわたって用いられていることから、「べし」表記としての固定化の強さの程もうかがわれる。

しかし、一方では、
○……戀に堪へずて 可死思へば^{〔四・七三八〕}

○……ふき手折り 吾が頭刺可^{〔一六八三〕} 花咲けるかも^{〔九・一六八三〕}などの用例に代表されるように、連用形として「べく」と訓むか、連体形として「べき」と訓むのか、諸本間でその訓み方が分かれるのも事実である。連体法は連用法と同じ場合があるということにも起因しているのだろう。

連用形「べく」の仮名表記は、「倍久」のようにほぼ一定した仮名で記される傾向にある。その語幹相当部分「べ」に、原因・理由を表わす接尾語「み」のついた「倍美」^{〔十四・三四六八〕}「奴倍美」^{〔十九・四一九三〕}の表記からは、「ましじ」と同様に、この語が形容詞と同じ語性をもつ助動詞であることがわかる。

更には、連用形「べく」の語幹相当部分「べ」に、活用語尾「く」を併記した例「應久」^{〔十二・三三三〕}もみられる。賀茂真淵は「久ハ之ノ誤」(『萬葉考』)とするが、集中語幹に「之」字をつけた例も見出しがたい。恐らくは、語形を正しく伝えようとする特別な配慮によるものであろう。今日いうところの語幹と語尾とを結果的に弁別するような意識がうかがわれるこうした表記に注目したい。

五 ましじ

主として、「カツ(勝)」と熟して可能表現の中で固定化して用いられる例がほとんどの「ましじ」もまた、固有の表記を持たなかった。語源については、一般に推量の助動詞「まし」に打消の助動詞「じ」のついた形というのが明らかではない。しかし、「まし」と「ましじ」の「まし」とは、ともに「益」や「申」字で書かれ表記が一致するから、当時両語を同じ語とする考え方もあったのかも知れない。

集中、「士」の仮名はごく稀なものであることは先述したが、それが「益士」^{△四・七二三}七・一三五[▽]のように用いられ、また「申自」^{△十一・二七〇二}▽のように「自」字と併用されているのは、好字模索のあとを留めたものであろうか。

そもそも、「ましじ」は訓詁上、比較的問題を多く含む。仮名書き例である「麻之自」二例のうち、△二十・四四八二[▽]について、橋本進吉氏は、集中「目」字を「モ」と訓む例が他にないことから、『元暦校本』に従って、「ましじ」と訓んでいる。^(註24)しかし、後藤和彦氏によれば、問題の「自」字は他の諸本すべて「目」字であり、『元暦校本』の本文に「自」と記されているものの、「右ニ墨目アリ」とあることから、これを直ちに「ましじ」の用例とするには問題が存する^(註25)という。また、

○……天の下 知らしめさむと 百代にも 不可易 大宮處
△六・一〇五三[▽]

○……山並見れば 百代にも 不可易 大宮處 △六・一〇五五[▽]
などにみられる「不可」^{マシジキ}を、『新訓萬葉集』や『萬葉集私注』は、旧

訓に従って「ベカラヌ」と訓む。一方、「ベカラヌ」と訓まれるには「有」、あるいは「良」字があるべきとする『代匠記』のような考え方もある。補助活用の場合、すべて「有」字があるとは限らず、たとえば「無之」^{ナシ} △七・一一三五[▽]などのように、「カラ」に相当する表記がみられないような例もあるので、確証とはなり得ない。むしろ、上接語となっている「変はる」が直接的には可能の意を表わさないことに問題をより多く感じさせる。

六 らむ

古屋彰氏によれば、大伴家持の用字には「武」から「牟」への変遷が認められ注目^(註26)されるという。集全体としてみれば、「良武」が「良牟」に比べて頻用されているにもかかわらず、巻十七以降に限ってみると、「良牟」の用例数が多くなるのは、やはりそうしたことの一斑であろうか。このことは、「家武」と「家牟」との関係についてもほぼ同様のことが言える。

○……夏草の 思ひしなえて しのふらむ(良武) …… △二・一
三二[▽]

○……夏草の 思ひしなえて 欺くらむ(將) …… △二・一三八[▽]
などのように、「良武」が「將」字になっている。また、

○……木の間より 我が振る袖を 妹見つらむ(良武) か △二・一
三三[▽]

○……木の間より 吾が振る袖を 妹見つらむ(將) か △二・一
三九[▽]

などのように、やはり「良武」が「将」字になっており、それぞれ筆録者の仮名書きから訓字表記への志向の強さを確かめることができるのである。

そもそも、「将」字と助動詞「む」とが結びつき、その深化がなされるにつれて、この「らむ」にも「将」字が宛てられるようになる。これは、「未実現・未確定の事柄についての推量を表わす「む」と、不確かな推量を表わす「らむ」との親近性が、主体の意志表示を離れた将字の用法を媒介として、ラムへの将の流用を可能にした」と理解して良いだろう。

「将」字は、やがて過去の推量「けむ」を表記するにも用いられるようになる。稲岡氏によれば、人麻呂歌集および作歌を通して、人麻呂が「けむ」を文字化するに際して徹底して仮名書きを選んでいるのは、「む」「らむ」「けむ」の三語の中で、「けむ」はもつとも「将」の字義に遠いからだという。

現在の推量を表わす「らむ」は、「けむ」とよく対比されるが、この両語は意味が重なり合う点で表記上注目されなければならないだろう。たとえば、

○宵に逢ひて 朝面無み 名張にか け長く妹が 慮せりけむ
〔計武〕へ一・六〇

などにみられる「けむ」は、過去から現在にわたる完了的な事実についてのことと解される。また、

○時々の 花は咲けども 何すれぞ 母とふ花の 咲き出来ずけむ
〔祁牟〕へ一十・四三三三

などでは、過去というよりもむしろ現在に重点が置かれていると考えられ、この助動詞の内容的広がりは大い。

従って、「神哉將離」へ四・六一九や「白水郎可將刻」へ七・一一

六七などは「けむ」とも訓まれているし、先にも掲げた「妹將見香園」へ二・一三九について、『注釋』は本文として「ミケムカモ」と「ミツラムカ」の二訓を挙げている。また、「衣丹措牟」へ七・一六六なども「ケム」の「ケ」を讀添えるのか、「ラム」の「ラ」を讀添えるのか判断に迷う例である。

時枝誠記氏は、「久草」「之鹿」の類を「話禮」などと同様の表音表意」として分類された。これを「表音表意兼帯の表記をもつ技巧的な用字のひとつ」として考える立場もあるが、同じような例は「等將」へ十三・三三三三九や「異將」へ十三・三三三三九などのように、助動詞の表記にもみられるから、国語の意味と同時に、音声をも示そうとした意図がうかがわれるものとして、前説に属さしめるのが適当であろう。

七 けむ

この助動詞も、対応する漢字をもたないところから、その多くは仮名で書かれる。とりわけ、已然形「けめ」はすべて仮名書きされることにその特色がある。

「けむ」と「将」字との結びつきについては先にも触れたが、「けむ」が用いられているのは前半の巻々においてであり、後半の各巻で用いられることがなかったのは、この表記が固定化しえなかったことを意味するのだろう。ちなみに、『新撰萬葉集』では「けむ」の表記は「兼(謙)」に限られる。

数多くの仮名書き例にあつて、人麻呂に珍らしい用字「價牟」へ二・二一七がみられる。小谷博泰氏によれば、このへ二・二一七の

長歌は、借訓字「敷」、不読字「也」を除けば、ほとんど『宣命』の文章表記に一致するといふ。^(註31)『宣命』のなかでも、第二詔(慶雲四年文武天皇)にだけみられる終止形「慈賜利」や連体形「仕奉流」(二例)の「賈」字と類似しており、表記法の関連性を考える上で注目してよいだろう。

八らし

この助動詞も正訓字の選択が期待できないところから、そのほとんどが音仮名で表記されているが、ごく稀に表意漢字が宛てられた例がみられる。

○……浅茅色づく 吉隱の 夏身の上に しぐれ零るらし〔疑〕
 へ十・二二〇七

○……もみち葉流る 葛城の 山の木の葉は 今し散るらし〔疑〕
 へ十・二二一〇

右の用例にみられる「疑」字がそれである。^(註32)

一方、この「疑」字は、
 ○十月 しぐれの雨に 濡れつつか 君が行く疑 宿か借る疑
 へ十二・三二二三

などの歌のように、確たる根拠を明示しての推定ではなく、主観的な疑念の度合いが深い場合には「ラム」とも訓まれる。

また、
 ○……島山の よろしき國と こごし疑 伊豫の高嶺の 射狹庭
 の……へ三・三三二二

などの歌にみられる「疑」字については、諸本間に文字の異同があ

り、「凝」や「敷」字の誤写とする考え方もあるが、『注釋』のように、「疑意」へ十・二二九九 二二三二四の用例と照合させて、疑う意の義訓としてこれを詠嘆の間投助詞「カモ」と訓むことに異論はなさそうである。

更には、これと関連するが、

○……難波堀江の 葦邊には 雁宿たる疑 霜の零らくにへ十・二二三五

などの歌にみられる「疑」字も、「カ」(『代匠記初稿本』『萬葉考』)、「ラシ」(『代匠記精撰本』『萬葉集古義』)、「ラム」(『全註釋』『古典大系本』)などさまざまな訓まれているものである。ここは、推定の根拠が示されていないことと併せて、疑問の意を含んだ詠嘆と解して「カモ」(『私注』『注釋』『全注』など)の訓をとるべきか。

右のように、集中、義訓字と解すべき「疑」は、助動詞「らし」、「らむ」のほかに助詞「かも」にも用いられるという浮動性がある。概念を直接的には表現し得ないという義訓字の性格が、やはりこうした浮動性になって現われたと考えられる。

「疑」は、主観的な解釈に支えられた用字であるために、定着しにくかった事情があったのであり、同じ義訓でありながら語と結びつく傾向が著しい「尚」、「欲得」、「乍」などとは対象的である。

次に、

○……春さり來之 あしひきの 山にも野にも 鶯鳴くもへ十・一八二四

などにみられる「之」字は、『総索引』を始めとして「ラシ」と訓むのが一般的であり、『校本萬葉集』にも異訓はみられない。諸注は類歌である、

○……春さり來之 山の際の 遠き木末の 咲きゆく見れば

〈十・一八六五〉

の歌の結句に「咲きゆく見れば」とあることから、これを「ラシ」と訓むことの傍証としている。

しかし、助字「之」と「者」との共通関係を調査なさった小島憲之氏によれば、先の「(來)之」〈十・一八二四〉もその中に「ラ」の表記がない以上、「ラシ」とは訓まないのが普通であり、「之」を助字とみなし、類歌にみられる「春去來者」〈十・一八三〇〉にならって「クレバ」と改訓すべきであるという。「之」が「者」に通ずることは、たとえば、「水手出去之」〈七・一三八六〉などがあり、これだけでは何れとも判定し難い。

集中、はたして「らし」に訓み誤りのない表記がなされているかどうかが問題となってくるだろう。ほぼ似通った句の間で、「浪立良下」〈七・一二二八〉や「釣爲良下」〈三・三五七〉などは、ともに「春立^⑥下」〈十・一八一二〉や「今爲^⑦下」〈十・二〇六一〉などのようにも表記され得る。

更に、「船出爲等霜」〈九・一七六五〉や「今時來等霜」〈十・二一三一〉などに対しても、これまた「今夕相^⑧霜」〈十・二〇二九〉や「今四來^⑨霜」〈十・二一三四一云〉などのような表記を、主として卷十にみる事ができる。これらは、「らし」の第一音節「ラ」が表記されない、いわば形式的な慣用とも考えられるものである。

従って、先の「來之」〈十・一八二四〉の場合も、これらの用例にならない「來^⑩之」と訓むことの蓋然性も高いと言わなければならないだろう。卷十は個人差よりもこの卷全体の用字に支配される傾向をもつと言われている。「ラ」を無表記のまま放置しても文脈から把握できるという意識から、あるいは、読添えに対する許容度の高さから、語の切れ目を明示するよりは、むしろ形容詞と同様に、「文節の

切目を際立たせる」^(註35)ことに主眼が置かれたものとなっている。

『萬葉集』の表記をこうした観点から考察することは、それぞれの品詞がどのように表記されているかを考える上での重要な示唆を与えてくれるだろう。

(平成二年三月十四日稿)

註

- (1) 大野透氏の『萬葉仮名の研究』第四章 常用仮名・準常用仮名」によれば、「自」は古層(推古朝以前に発生)の仮名で、奈良時代を通じて常用されているものである。「士」は、その古層と新層(八世紀の長安音を基盤にして発生)との間に位置する中間層の仮名であるという。
- (2) 『萬葉集表記論』第二篇 卷五の論 第二章 各論」参照。
- (3) 澤瀉久孝氏著『萬葉集注釋 卷第五』参照。
- (4) 金思燁氏著『記紀萬葉集の朝鮮語』第三章 郷札と萬葉仮名」参照。
- (5) 「緇」は『類聚古集』では「綏」字になっている。また、『西本願寺本』『大矢本』『京都帝國大學本』では「緇」字になっているが、管見では助動詞「ジ」の仮名として用いられているような例は、他の上代文献にもみられない。
- (6) 日本古典文学大系の『萬葉集四』の頭注には、「使用者が字音を精しく知らず、字画の複雑さから、濁音に使う文字と違って使用したものであろう」とある。これを受けて、中村隆彦氏は『万葉集卷十五編纂試論』(北海道大学国語国文研究 第三十八号・昭和四十二年九月)のなかで、「発音のはっきりしない文字を試みに使ってみたものと思われ用字癖というには遠いもの」と考えておられる。
- (7) 小林芳規氏の「古事記における推量表現とその表記との関係」(『佐藤退官論集国語学』所収) 参照。
- (8) 松尾捨治郎氏は、「じ」を「ず」とほぼ同じ意に用いた例として、みつみつし久米の子らが垣本に植ゑしはじかみ口ひく吾は忘れじ(『志』撃ちてしままむ(古事記・中・歌謡十二))の歌が、『日本書紀』(卷三・歌謡十四)の方では、「われは忘れず(『備』)となつてゐることを指摘しておられる。(『国語法論攷』第六章の第七節 打消の助動詞)
- (9) 『本簡と宣命の国語学的研究』七 宣命体表記における返読と送り仮名

- 参照。
- (10) 『萬葉語研究』「不知」の訓について。
- (11) 拙稿「萬葉集の形容詞語尾の表記について」(函館国語) 第二号 昭和六十一年十一月、「萬葉集における動詞の表記 資料編・下」(北海道教育大学紀要) 第三十八卷二号・昭和六十三年三月。
- (12) 註(1)に同じ。
- (13) 註(2)に同じ。「第二章 人麻呂の表記の展開」参照。
- (14) 『文学』第四十七卷八号・昭和五十四年八月、並びに、「同上」第四十七卷十一号・昭和五十四年十一月。
- (15) 大系本『萬葉集』の頭注によれば、ヌレテユカムミムでは字余りになるし、かつ、その中に母音だけの音節もない。「將」字の位置が、一字先に書かれたものとして、ユクミムと訓む立場をとる。
- (16) 「借訓仮名の多様性——新撰萬葉集の場合」(『萬葉』第五十七号・昭和四十年十月) 参照。
- (17) 「萬葉集巻五追補の一時期に就いて——家持の類句・類想・用字の面から」(『国語と国文学』第三十九卷第一号・昭和三十七年一月) 参照。
- (18) 註(4)に同じ。
- (19) 中村隆彦氏の「万葉集巻十五編纂試論」(『国語国文研究』第三十八号・昭和四十二年九月) 参照。
- (20) 漢字文2 『万葉集』新撰万葉集」(漢字講座・5 古代の漢字とことば」所収) 参照。
- (21) 「上代の東國俚言——東歌・防人歌の解釋の方法に関する問題」(『萬葉』第四十号・昭和三十六年七月)。
- (22) 井出至氏の「万葉仮名」(漢字講座・4 漢字と仮名」所収) 参照。
- (23) 拙稿「萬葉集における形容詞の表記について」(北海道教育大学紀要) 第三十六卷二号・昭和六十一年三月。
- (24) 『萬葉時代のまじ』(『上代語の研究』所収) 参照。
- (25) 『まじし』から『まじ』への推移」(『萬葉』第七十号・昭和四十四年一月)のなかで、後藤氏は、諸本「目」字が圧倒的に優勢である。このような所伝には、やはり何かそれなりの意味があるのであるのではなからうか、と考えておられる。
- (26) 「家持用字法の研究序説」(『金沢大学法文学部論集 文学篇』十五卷・昭和四十二年) 参照。
- (27) 註(13)に同じ。
- (28) 『時代別国語大辞典 上代編』の「けむ」の(考) 参照。
- (29) 『國語學原論』第一篇 各論 第二章 文字論」参照。
- (30) 註(22)に同じ。
- (31) 『万葉集巻一・巻二の用字と表記——人麻呂作歌の筆録者をめぐって』(甲南大学紀要) 文学編六十八・昭和六十三年三月) 参照。
- (32) 「疑」(八十・二〇七)は、「古典大系本」などのように「ラム」とも訓まれるが、場所も表現様式も共通する「……浅茅色づく吉隠の浪柴の野の黄葉散る良新」(八十・二一九〇)の歌との関連から「ラシ」と訓む。つまり、庭先の浅茅が色付いたことと、吉隠の夏身の上にしぐれが降ることとの間に関係を認める(『全注 卷第三』の考へ方に従う)。
- (33) 「上代日本文学と中国文学 中」(第五篇 萬葉集の表現 第四章 萬葉集の文字表現」参照)。
- (34) 蜂矢宣朗氏は「二音節助動詞の一部読添へについて」(『萬葉学論叢』所収)のなかで、「上接する活用言の語尾のラ行音が連想的に働いて下の助動詞のラの表記を省略すること」を、「連想的読添へ」と呼んでおられるが、これに相当するものである。
- (35) 橋本四郎氏の「多音節仮名」(『萬葉学論叢』所収)によれば、「語幹の独立性の高い形容詞では、『高雲』(三二四五)『悲霜』(四三四)『忌染』(二二七五)のやうに語尾を後行素に結びつけて文節の切目を際立たせる方向が目立つ」という。助動詞「らし」の表記にもこうした傾向がみられるのは、当時、「こそ」の係りに対して「らしき」で結んだ例のあることと併せて、この語が形容詞性の強い語として考えられていたことの一環となる。

(本学教授・函館分校)

『萬葉集』における推量の助動詞の表記について

4			
べし		語	
可 ^レ 倍子 倍志 倍斯 倍思 倍之 應久 應 ^レ	可 ^レ 部久 倍久 増 猿 猿 申	益 麻斯 麻師 摩斯 萬旨 麻死 萬思 末思 麻志	表記(用例数)
⑬①②③	⑬①②④⑪	⑳①①①①③③④	
三・四・七・九・十 五 五・十九 ⑤ 十七 ①・②・③・④・十五 ①・五・十五・十七 十九・二十 ①・②・③・④・十五	七 二 四・十 七・九・十一・十二 二・十三 八・十・十一・十二 二・三・四・六・七 十四 ⑨ 五 ① ② ③ ④	④・五・八 ③・九・十五 ①・②・十七 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿	卷
6			
らむ		語	
良武 不可 ^レ 不 ^レ 申自 不得 不(自) 益士 麻思自 麻之自 ②可 ^レ 應(見) 可(見) 可(美) 蛇 可 ^レ 倍美 應 ^レ	弊伎 倍伎 倍吉 應 ^レ	表記(用例数)	
⑦③①①①①②①②②①①②①②②	⑭	⑳①①⑤⑧⑫	
十五・①・②・③・④・⑤・⑥・⑦・⑧・⑨・⑩・⑪・⑫・⑬・⑭・⑮・⑯・⑰・⑱・⑲・⑳・㉑・㉒・㉓・㉔・㉕・㉖・㉗・㉘・㉙・㉚・㉛・㉜・㉝・㉞・㉟・㊱・㊲・㊳・㊴・㊵・㊶・㊷・㊸・㊹・㊺・㊻・㊼・㊽・㊾・㊿	十四・十九 八・十 九・十 七 二 十一・十三 ①・二十 ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿	卷	
7			
けむ		語	
家牟 家末 計萬 奈米 奈武 奈牟 那毛 奈毛 奈母 良目 良米 ②牟 ②武 疑	將 藍 覽 濫 等將 良六 等六 良无 良無 良牟	表記(用例数)	
②②①①①①②①①③⑥	⑤③①⑥	⑫①①④①②	
①・②・③・④・⑤・⑥・⑦・⑧・⑨・⑩・⑪・⑫・⑬・⑭・⑮・⑯・⑰・⑱・⑲・⑳・㉑・㉒・㉓・㉔・㉕・㉖・㉗・㉘・㉙・㉚・㉛・㉜・㉝・㉞・㉟・㊱・㊲・㊳・㊴・㊵・㊶・㊷・㊸・㊹・㊺・㊻・㊼・㊽・㊾・㊿	十 二・三・四・六・七 九・十・十一・十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百	卷	

8		
らし		語
良思	良之 異目 鷄目 鷄米 奚米 計米	表記(用例数)
④④	⑥⑤ ① ② ① ① ②	⑫ ② ⑦
⑤・⑧・⑨・⑩・⑫・⑭・⑮	①・③・④・⑥・⑦ ⑧・⑨・⑩・⑪・⑫ ⑬・⑭・⑮・⑯・⑰ ⑱・⑲・⑳・㉑・㉒ ㉓・㉔・㉕・㉖・㉗ ㉘・㉙・㉚・㉛・㉜ ㉝・㉞・㉟・㊱・㊲	①・③・④・⑤・⑧ ⑩・⑪・⑫・⑬・⑭ ⑮・⑯・⑰・⑱・⑲ ⑳・㉑・㉒・㉓・㉔ ㉕・㉖・㉗・㉘・㉙ ㉚・㉛・㉜・㉝・㉞ ㉟・㊱・㊲・㊳・㊴ ㊵・㊶・㊷・㊸・㊹ ㊺・㊻・㊼・㊽・㊾ ㊿
		語
	平 ^㊿ 斯 ^㊿ 疑 ^㊿ 霜 ^㊿ 下 ^㊿ 師 ^㊿ 良志 良師 良斯 良信 羅之 羅芝 良新 良芝 良霜 良下 羅霜 等霜 等思 良思吉 () ^㊿ 之	表記(用例数)
	① ① ② ② ② ⑥ ③	⑮ ② ① ⑥ ① ④ ⑤ ① ① ① ① ② ③ ③ ⑫
	十一 九 四・十二 十 十 七・十・十一 三・十一 十九 一・三・六・七・九 十・十一・十六・十九 ①・⑥ 七 六・七・九・十 十三 三・七 二 三・七・九・十・十一 ⑩ ⑩ ⑩ ⑦ ⑥・⑨ 五・⑨ ③ ③ ⑫	①・③・④・⑤・⑧ ⑩・⑪・⑫・⑬・⑭ ⑮・⑯・⑰・⑱・⑲ ⑳・㉑・㉒・㉓・㉔ ㉕・㉖・㉗・㉘・㉙ ㉚・㉛・㉜・㉝・㉞ ㉟・㊱・㊲・㊳・㊴ ㊵・㊶・㊷・㊸・㊹ ㊺・㊻・㊼・㊽・㊾ ㊿

〔注記〕

1. 原表記については、仮名書きのものを原則として先に示し、次に二合仮名や訓仮名を用例数の多い順に並べた。
2. 卷の欄に○印のあるものは、変体漢文の巻で仮名書きのなされているもの、並びに仮名中心の巻で訓仮名の表記がなされていることを意味する。
3. 読添えなどはとらなかつたが、たとえば、
 ㊿武とあるのは、第一音節が無表記であり、一部読添えの形になっていることを示す。